

和歌：文苑

著者	稼堂, 下山, 陸治, 江楠生, 溪川, 學人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	36
ページ	45 - 47
発行年	1895-05-07
URL	http://hdl.handle.net/2298/4571

れど知りつれども、今は君の使あれば、力あし、歸りこむ時にど、心に念じて、たち去りぬ。さて歸さに、徐に至れば、子の君既に身まかり給ひきと云ふ。季札いたく悲みて、子の劔を献らむといひりれば、供の者、徐の君は、既にこの世に亡きものをといふ。季札いふ、先きにおのか心に許しけるを、死をもて、違へおむや、とて、世子か許に贈りけるに、御志は、辱なくこそ候へ、されども、我が父も、さる詞のあかりしを、賜はるへきことかは、ど強ひて與へられども、受けず。さらば、せんなしとて、即ち徐君の墓をどひゆきて、劔を松の枝にかけて去りにければ、徐の人、

季子はやちもとの契を忘らずて、冢つかのたち樹に劔たちかけましき

と詠みて、いと、子の義に感じけるとぞ。季札は、吳の君壽夢が第四子にして、延陵といふ所に封せられければ、世に延陵季子といふ。兄弟のうち、尤賢かりしかば、世を嗣がせむと、父の君の申されまかども、聽かさりければ、長子は諸樊といふを立て、さて季子に國政を攝あつからまめき、といひ傳へけり。

花下酌酒

縁

堂

長閑ある春のころに浮出つる花のさかつき盡せさりけり

所々花盛

内も外も春の最中にありぬれば掃ふも花の塵にそありける

本妙寺に詣でよめる
あぢ尊ふと神とも神ときこえくる神のまことの尊きろかも

千原の花見三首

里の子が指さす方にしらくものたつや千原のはぢの一むら
この花の車とよめの名もゆかしやよ車とめあめは降るども
降りかゝる今を盛の花のあめいつかあみたの雨となりゆく
亡父の夢に見え給ひけるに

年ふともおもひ遣られぬ心よは夢を夢ともおもはさりけり
いかにせむ現とも見る亡親とかたらふひまも夏の夜のゆめ

夕雲雀

夕雲雀雲井はるかにあかるとももとのすみれの床は忘れし
朝まだきに、數百羽の鶏を籠にわしいれて、人の車二兩に載せて、しばし
休ひけるに、諸聲たてよ、鳴きける、いとかしましく、あはれあるを、格子の
さまより打詠めて、

哀れ其身れ罪あきを天つ神にうたへんとてや鳥の鳴くらむ

栗屋五百藏の身まかりし後その遺文をみて

土かひし花の散ゆく悲しさは人のものとはなもひやはする

黒木師團長の御軍にたち給ひしあとに櫻のいたう美しくささいてた

るをよめる

下山 陸治

見せはやあ君ういさをにささるふる春の園生の花の盛りを

餘寒月

江楠 生

天津そらいつとて風のさゆるらん春としもかく氷る月かけ

野 蕨

たらのほる烟とともにもえいつるやけ野のくさの下蕨かな

歸 雁

今はとてはあをミすて、ゆく雁の空の霞やなこりあるらん

霞中雲雀

まはふよりあかる雲雀の聲のみは野邊の霞も包みかねけん

落 花

溪川 學人

山川の岩瀬よとみて大渦のうつまくうへに落るさくらかな

悼粟屋五百藏君辭

秋月 胤繼

明治二十八年四月三日、同學粟屋五百藏君以病逝于熊城客舍、嗚呼余豈忍言之乎、君
豐前豐津人、自幼志學、壬辰歲九月、負笈來學於我、校爾來幾歲、孜孜矻矻、研鑽不怠、是以
學業日進、本年七月、爲其卒業期、其喜可知也、況於其雙親乎、而一朝爲二豎所犯、終不起、